

平成 24 年度教職大学院派遣研修研究報告書

研修生番号	24K02	氏名	土方 大輔
研究主題 —副主題—	文学教材における「シンプル化した授業」構想のための学習方法論		
所属校	練馬区立光が丘秋の陽小学校	派遣先	創価大学教職大学院

項目	内容
I 研究の目的	<p>「読解力向上プログラム」(平成 17 年 12 月文部科学省)は、克服への手だての前提として、「特に」と取り立てて「文学的な文章の詳細な読解に偏りがちであった指導の在り方」を課題として、その克服を訴えている。「詳細な読解に偏りがち」である文学教材の授業が、子供の学習意欲を低下させ、「国語嫌い」をつくる原因の一つになっていると考えることができる。</p> <p>また、ベネッセコーポレーションの調査では、学校現場における国語の授業進度について 4 割で遅れがあったことが報告されている。また標準授業時数が小学校 6 年間で 1377 時間(平成 14 年～)から 1461 時間(平成 23 年～)と約 6%の増加なのに対し、教科書のページ数は約 25%の増加となることもその一因として捉えることができるだろう。実際に教科書での教材の予定時数設定を見ても、共通教材を比較するとおおむね時数が少なくなっていることがわかる。このような実態からも、これまで通りの授業からの変化が求められる現状を見て取ることができる。</p> <p>以上の現状を見たとき、精読主義の課題を解決する方法の一つとして、「シンプル化した授業」の必要性を見出すことができると考えた。</p> <p>そこで、本研究は文学教材における「シンプル化した授業」の有効性の検証と、成立要件の整理を目的とする。「シンプル化した授業」の実現が、現在の国語授業における課題を解決する要因となることを明らかにしていきたい。</p>
II 研究の方法	<p>「シンプル化した授業」を指向したと考えられる先行研究の分析を通して、「シンプル化した授業」が成立する要件を取りだし整理していく。そして、その整理した要件をもとに実際の授業を構想し、その有効性と妥当性を論証していく。</p> <p>先行研究として取り上げたのは、次の 5 点である。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 学習の無駄を排除した配当時間削減の提案 2 多読のための授業スリム化の提案 3 精読主義を改める三つの授業のタイプの区別 4 「シンプル化した授業」の提案 5 スリム化授業の提案 <p>そして、この中の長崎伸仁による「シンプル化した授業」の提案に関連させて、国語の学力の観点からも「シンプル化した授業」の必要性にせまり、「シンプル化した授業」が成立する要件を次の三つの観点をもとに取り出し整理した。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 学習のスリム化と連動する「学習者の視野を広くもたせ、全体を横に切って読む授業」 2 「授業のシンプル化」構想の上での「大きな発問」のとりえ

3 読み書き融合で表現に開く

III 研究の結果

先行研究の課題を分析した結果、「シンプル化した授業」の要件を以下のように取り出すことができた。

- a. 教材の特性を吟味し、指導事項を厳選すること
- b. 全体と部分を行き来させる「大きな発問」であること
- c. 読み書き融合を通して「開かれた表現力」を目指す授業であること

◎ 「シンプル化した授業」試案例——『お手紙』

シンプル化した授業試案

次	時	学習活動
第1次	1	教材との出会い。挿絵を並び替え、自分の言葉で物語のあらすじを発表する。
	2	物語を「〇〇が、〇〇して、〇〇したお話」という形で捉え、交流する。
第2次	3	かえるくんの「いいところ」と「よくわからないところ」を読み取る。
	4	「二人とも悲しい」「二人とも、とてもあわせ」の度合いを考える。
第3次	5	がまくんになりきり、かえるくんに返事のお手紙を書く。
	6	書いたお手紙を読み合い、交流する。

物語は、かえるくんががまくんの「かなしい気持ち」に共感したことから動き出す。だからこそ、作品を場面で区切って、登場人物の心情ばかりを問うのではなく、二人の関係性に迫ることで読み深めたい(a)。

第1次第2時においては、物語を「〇〇が、〇〇して、〇〇したお話」というログライン（一行説明文）で捉える

ことで、物語の全体像をつかませる。特に次時以降に生かされることもなく、定型の「初発の感想」を書かせるより、読む目的をつかませやすく、文章全体を視野に入れさせることにつながる (b)。

第2次第4時においては、二人の「かなしい」、「しあわせ」の度合いを考えさせる。この時、がまくんとかえるくんのどちらが「かなしい」、「しあわせ」か、もしくは同じくらいかと判断を投げかけることにより、文章中の二人の行動から具体的な根拠を様々に考えることを促すこととなる (b)。

第3次の活動においては、がまくんになりきり、かえるくんに返事のお手紙を書く活動を行う。2次までに読み取った二人の関係の理解をもとに、自分の言葉でがまくんの気持ちを表現させる。この表現の活動を通して、さらにはがまくんの気持ちを深く理解することにもつながるのである。読む活動が書く活動と融合し、さらに読みが深まっていく (c)。

教材の特性から二人の関係性に着目し、指導事項を絞り、それをつかませる「大きな発問」を投げかけ、表現させたことにより、授業展開がシンプルになり、子供の思考をすっきりさせ、意欲的な学びを引き出すことにつながるのではないかと。

IV 考察

これまでの国語授業の課題すべてが、「シンプル化した授業」で解決されるわけではあるまい。作品全体を包括的に扱う手法については、さらなる探究の課題である。また「シンプル化した授業」によって実際に授業がスリム化した場合に、結果として生み出された余時数においてどのような活動を組み立てるかは、本研究の延長線上にとらえる必要がある課題であろう。これらについては、自身の今後の研究課題として、さらに追究していきたい。